

1 次の文章を読んで、あとの問1から問6までの問いに答えなさい。

1 かつて私たちは、自由のためには批判的な精神をもつことが重要だ、という言葉をしばしば耳にしてきた。それは、たとえば権力や権威に屈してはいけなかったとか、多数派の意見に迎合するような態度をとってはならないとか、通俗的な見解はつねに疑ってみる必要がある、真理は多くの場合少数者のものであって、真理を追求するうえでの孤立を恐れてはならない、というようなものであった。それらは、自由な精神をもちつづけるための、最低限の条件であった。この健全な批判精神が、自由な精神を維持するためには必要だと、私たちは教わってきた。もちろん、その重要性を私も否定しない。だがそれだけで、自由な精神をもちつづけることができるのだろうかと問われれば、必ずしもそうもいえないのである。(中略)

2 以前の私は、子供の頃に覚えたダーウィンの進化論、簡単に述べれば、生物たちは環境に適応しながら進化をとげてきたという説を、真理だと思いこんできた。「A」、子供の頃に読んだその分野の本には、どれにもそう書いてあったからである。ところがある時期から、それもまたひとつの仮説にすぎないのだと思うようになった。ダーウィンの進化論が真理だとするだけの確実な証拠はないことを、知るようになったのである。今日の生物進化の理論には、主流をしめる修正ダーウィン理論、共生的進化の理論などいくつかの説があり、神が生

物を創造したとする創造説も、アメリカなどでは結構根強いものがある。私は生物学者ではないから、自分でこの問題を研究することはない。その立場から述べれば、生物進化に関するすべての理論は、今日なお仮説以上のものではなく、何が真理かは確認されていないと考えておくことが、一番妥当なのである。ところが、にもかかわらず以前の私は、ダーウィンの進化論的な視点から、生物界をみていた。進化の遅れた生物、進んだ生物という観念も受け入れてきた。しかし、いまではそれは誤りだったのではないかと感じている。少なくとも、生物には遅れた生物も、進んだ生物も存在せず、それぞれの生物が大きな共生関係を結びながら、それぞれの世界を十分に生きているのだと思うようになった。「B」、そう考えるようになって、はじめて、十分に生きている生き物たちの、自由さがわかるようになった。

3 もっとも私は、どちらの説が正しいのかを、問うていたのではないのである。ここで私が問題にしているのは、ひとつの認識方法を手にしたこと、その角度からしか、ものをみることができなくなってしまう、ということである。歴史の世界でも、かつて私たちは、封建主義の時代という認識方法を手にしてしまったために、共同体時代を、人間たちの悲惨な時代という視点からばかりみる習慣を身につけてしまった。この問題は今日、歴史社会学からの見直しが進められているけれど、こうして生まれてきた新しい中世社会論や、江戸時代論などを読むと、かつての封建社会論が、あまりにも

① 歴史のとらえ方

だったことがわかる。このように考えていくと、私たちは、ひとつの認識方法を自分のものにしたことによって、かえって、ものごとを自由にみていく精神を失うことがある、と気づくのである。

4 私たちは、いろいろなものを認識しながら生きている。自然を認識し、社会を認識し、人間とは何かを認識しつづけている。しかしその結果、自然や社会や人間を、自由にみていく精神を失っているのかもしれない。そればかりか、認識することによって、認識したとおりの世界が、実際にあると思いきや誤りをおかす。そして、ときどき私たちは、自分たちの認識の誤りを批判され、そのときはじめて、私たちが認識していたような事実は、存在していなかったのだと気づくのである。たとえば欧米の社会を基準にして世界をみていたときは、人々は非欧米地域には未開の地が広がっていると認識し、そこには事実として非文明的地帯があると思いきや誤りだった。ところが、このような世界観は、後に多くの人々の批判をあびるようになる。その批判を受けて、私たちは、かつて認識していたような未開の地域など存在せず、世界にはさまざまな文明が展開しているだけだ、ということに気づくようになった。といっても、それもまたひとつの認識である以上、批判されるときがくるかもしれないのである。このように考えていくと、たえず、ものごとを認識しながら生きている人間には、その認識という行為の中に、^②人間の精神を不自由にしていくながら芽が生じているように私には感じられてならないのである。そして、だからこそ私は、

人間にひそむ不自由な精神を、つねにみつめていたい。自分の認識は誤りではないかと、つねに思いつづける精神をもっていたい。それが、認識という行為をおこなっている人間の、とるべき態度ではないかと、思えるのである。(中略)

5 現実の中で生きている以上、現実にとらわれた精神をもちつづけている、それが私たちの姿である。とすると、自由な精神を得ようとして挑みつづけるところに、人間の精神の自由さはあるのであって、^③何ものからも自由になつた精神自体があるわけではないのであろう。その理由のひとつに、次のようなこともある。人間は、言葉を媒介にしてものごとを考えている。無意識の世界では、言葉を介さずに何かを感じたり、何となく安心したり、いらだったり、了解したりしているのに、意識化された世界では、人間の精神は言葉を用いて思考する。もつとはつきり述べれば、言葉が生まれたことによって、人間は意識的な思考をするようになったといってもよい。たとえば私たちは、自然保護という言葉が生まれたことによって、自然保護について考えるようになったのではなかったか。もちろんそのような言葉がなくても、自然が好きな人や、自然を大事なものと思う人たちはいただろう。しかし、自然を保護の対象として考える思考方法は、自然保護という言葉がなければ、多くの人のものに、なることはなかった。同じように、美しいという言葉がなければ、私たちはそれをみて何らかの感動を覚えても、それを美しいという概念で考えることはなかったであろうし、

明治時代になって自然や愛という言葉が入ってくるまでは、日本には、自然や愛という言葉を用いた思考回路は存在していなかったのである。

〔6〕

ところが言葉を用いて思考する以上、どうしても私たちの精神は、その言葉を用いて、ものごとを認識するようになる。自然という言葉が日本に入ることによって、生物たちの世界を自然としてとらえはじめたように、人間の言葉は、言葉のもつ意味に支配されながらしか動かないのである。その言葉には、その時代がもたらした特有の意味がこめられている。たとえば近代国家が生まれなければ、今日私たちが使っているような意味での「国家」とか「国」という言葉は誕生しなかったはずなのに、現在の私たちは、近代国家成立以降の「国家」とか「国」という言葉にとらわれた、思考回路をもっているのである。とすると、言葉を用いて思考することによって、私たちの精神は、その言葉をつくりだした時代の考え方に支配されるのかもしれない。そして自由な精神をもとうとすれば、そのことに挑みつづけなければならないのかもしれないのである。

（内山節『自由論——自然と人間のゆらぎの中で』うちやまたかしによる）

（注）

○ 〔1〕〔6〕は段落符号である。

○ 迎合Ⅱ自分の考えを曲げてでも、他人の意向や世の風潮に調子を合わせること。

○ 通俗的なⅡ誰にでもわかりやすさま。

○ 封建主義の時代Ⅱここでは、主従関係を社会の基盤としていた時代のこと。

○ 共同体時代Ⅱここでは、人々が血縁関係や住む土地のつながりの中で暮らしていた時代のこと。

○ 媒介Ⅱ二つのものの間をとりもつもの。

2 次の問1、問2の問いに答えなさい。

問1 次の文中の傍線部について、カタカナを漢字で書きなさい。
過去十年間の留学生のゾウゲンを調べる。

問2 次の文中の「 」にあてはまる最も適切なことばを、
あとのアからエまでの中から選んで、そのかな符号を書きなさい。
彼のすばらしい演奏は、「 」にできるものではない。

ア 一朝一夕 イ 一喜一憂 ウ 一長一短 エ 一進一退

3 次の文章を読んで、あとの問1から問5までの問いに答えなさい。

〔本文にいたるまでのあらすじ〕

松磬堂しょうけいどうに鎌倉彫かまくらぼり（木器に彫刻を施して漆を塗った工芸品）の稽古くわこに通う若林美佐子わかばやし みさこは、岩壁登攀とうはん（ロッククライミング）にも熱中していた。美佐子の彫刻の腕は師の松磬も驚くほどに上達し、松磬は美佐子に屈輪彫くわりんぼり（鎌倉彫に好んで使われる技法で、高度な技術を要する）に挑戦するよう促している。

〔本文〕

1 若林美佐子の足は重かった。師の家が近づくにつれて彼女の気持ちもまたへ A へいった。屈輪彫をやってみなさいと言われたのは六月だった。それから三か月もたっているのに、彫りに取りかかつてはいなかった。文様がきまらないからだ。師の松磬はヒントが山にあるはずだと言った。確かにそのヒントは六月のある晴れた日のお昼ごろ、一の倉岳いちのくわくの頂上において天から与えられた。青空いっぱい浮かぶ巻雲けんうんとその末端のカールはそのまま、屈輪彫に生かすことができた。しかし彼女はそれだけでは物足りなかった。百ほども図案を書いたが一つとして師の前に自信をもって持ち出せるようなものはなかった。

2 谷川岳たにがわだけにはウィークデーを利用して月に二度は出かけていった。パートナーはきまつて佐久間博さくまひろしだった。谷川岳の岩壁を次々と登り、登るたびに新しい技術を身につけていた。その激しくてスピーディな佐久間の特訓を受けながらも、彼女は暇があれば目を空に投げていた。屈輪文様のヒントとなるべき、より以上図形的な雲を探し続けた。しかし、一の倉岳の頂上で見たような雲は二度と現れなかった。屈輪彫に一日も早くかかりたかった。しかし文様がきまらなくてはどうしようもなかった。あせればあせるほど屈輪文様は彼女から遠のいていくような気がした。（私にはその才能がないのかもしれない）そんなことをふと思った直後には、そのまま山へ直行したいほど山が恋しくなった。

3 佐久間の特訓を受けながら、彼女自身の内部では文様創作の特訓が

続いていた。古来から伝えられている鎌倉彫の屈輪文様は余すことなく模写した。現代作家による屈輪文様もすべて研究し尽くした。それらの基礎的文様の上に彼女自身の文様を創作することがいかに難しいものかが日を経るに従って分かってくる。他人が登った岩壁にはハーケンや埋め込みボルトが打ち込んであるから、そのルートを追っていくかぎりそう難しいことではないが、未登攀の岩壁は想像もできないほどの苦勞をしないと登ることができないのと比較して考えていた。

彼女は岩壁登攀と屈輪文様の創作とを強いて結びつけて考えたくはなかったが、しかし岩壁登攀に熱中している彼女の中のもう一人の美佐子が岩壁登攀と同じように、屈輪文様に没頭していく姿を無視できなかった。

4 師の前での朝の挨拶がつらかった。その直後、「屈輪文様はきまりましたか」と師に聞かれたとき返事ができなかった。「まあいいさ、気に入ったものができるまで構想を練ることだ。他人のまねをやるより、すべて初めっから新しい発想でいくのもあなたらしい」と松磬は言った。彼女はその言葉にへ B へいた。屈輪彫をやってみると言われたときから、彼女はその作品に全力を集中しようと思った。それが成功するかどうか、自分の将来をトするもののように思われた。彼女は松磬堂の仕事場の机の前に座って牡丹、椿、薔薇などのありきたりの文様を彫りながら屈輪文様をあこれと頭に描いていた。「新しい文様はそう簡単にきまるものではない、なにかの折に、ふとそれが頭の

中に浮かぶ。その浮かんでいる間に手早くそれを写し取るのだ」さよならの挨拶をするとき、松磬はこのようなことを言った。考え続けなさいと言われるとそれが重荷になった。彼女は帰宅すると、すぐ二階の仕事場が上がって、文様の創作に取りかかった。(中略)

5 彼女は内弟子ではなかったが、それに準ずるだけの技術をもっていたから、松磬堂に多量な注文があった場合はその仕事を手伝わねばならなかった。単純な文様の菓子皿だとか盆のようなものが多かった。下請け的な仕事だったが、それによつてかなりの報酬を得ていた。山へ行く費用はもちろんのこと小遣い銭にも不自由はなかった。やろうとすればそういう仕事はいくらでもあったが、必要以上の仕事を持ち込んでくることはなかった。松磬に頼むと言われると徹夜をしてもその仕事をやった。仕事が丁寧で間違いがなく、出来上がりが立派だった。彼女は屈輪文様のことはしばらく頭の外に置こうと思った。そればかり考えているといよいよ溝に落ち込んでしまうからであった。

6 夏が終わった。鎌倉の海岸から海水浴客の姿が消えたころ続けて台風がやって来た。海水浴場はきれいになった。台風が去った朝、海岸をチビをつれて走った。犬を解き放し、砂浜を力いっぱい走ると汗が出た。彼女は砂浜に腰をおろして海の向こうに目をやった。巻雲が浮かんでいた。が、谷川岳の頂で見たものとは違って、その先端がカルしてはいなかった。波が高かった。台風の余波が白い牙を出して、おしよせていた。その三角波の波頭が岸近くになつて巻き崩れるよう

に落ちていくのを見て、彼女は一つのヒントを得た。巻雲のカールと波のカールを合一した文様はできないだろうかという着想だった。それを紙に書いてみたくなった。その朝は鎌倉山へかけ登る予定だったが、それをやめて、最短距離を走り帰って二階の机に向かった。

7 彼女は三時間ほど遅れて松磬堂の仕事場へ行った。お早うございます、の挨拶のあとに彼女は、「これでよろしいでしょうか」と言って文様を書いた紙を師の前に置いた。彼女がお早うございます以外の言葉を使ったのが珍しかったので、松磬は彼女の顔を見てから文様を書いた紙を手もとに引きよせた。それは雲と波とが和合する図であった。

雲は明らかに巻雲を示すもので、繊細な巻雲の渦が次々とからまり合うように連なっている下に、明らかに怒濤どとうの波頭を思わせるような雄大な渦が立ち並んでいた。静と動とを屈輪文様で描いたともいえだし、雲と波との戯れたわむを神秘的に象徴化したともいえた。新しい観点から発した屈輪文様で、過去の形式を脱しながら屈輪文様としての基礎的作法を忘れてはいなかった。松磬は言葉を失ったようであった。とっさに言葉は出なかったが、感動は彼の表情を①怒った顔にしていた。「これは金牌きんぱいものだ」とひとこと言った。毎年、秋遅くになって鎌倉彫の新作展覧会があった。優等賞には金牌が贈られた。金牌は一つの場合も二つの場合もあったが、多くは既に巨匠と呼ばれている人のために用意されていた。松磬も金牌受賞者の一人だった。まれには若い人がその賞を受けて一躍巨匠の中に加わることがあった。「これは金牌もの

以上だ」と松磬はほめてから、「あとは彫るだけだ」と言った。②松磬の顔に複雑な色が動いた。

(新田次郎『銀嶺の人』による)

(注)

○ 1 7 は段落符号である。

○ 巻雲けんうん 高い空にほうきで掃いたようにかかる白雲。

○ カール 巻いていること。

○ 佐久間博 美佐子の所属する山岳会の主宰者。

○ ハーケン 岩登りの際、岩の割れ目に打ち込んで手がかりや足がかりにする金具。

○ トする だらう。

○ 内弟子 師匠の家に住み込んで教えを受ける弟子。

○ チビ 美佐子の飼っている犬の名。

○ 怒濤どとう 激しく荒れる大波。

○ 金牌きんぱい 賞として与えられる金色の盾やメダル。

4

次の漢文（書き下し文）を読んで、あとの問1から問4までの問いに答えなさい。（本文の……の左側は現代語訳です。）

宓子、宣父を治むること三年、而して巫馬期、綯衣短褐し、容貌を

……として……

粗末な衣装を……身につけ

易へ、往きて化を觀る。夜漁する者の魚を得て之を糶つるを見、巫馬期

変え……

（宣父の）変化の様子

逃がす……

問ひて曰はく、「凡そ子の魚を為す所は、得んと欲すればなり。今得

尋ねて言うことには……

そもそもあなたが漁をするのは、魚を手に入れたいからである……

て之を糶つるは何ぞや。」と。漁する者、対へて曰はく、「宓子は人の

……どうしてか

……答えて……

小魚を取るを欲せざるなり。得る所の者は小魚なり。是を以て之を糶

……稚魚……

……そこで……

つ。」と。巫馬期、歸りて以て孔子に報じて曰はく、「宓子の徳至れ

……つ。……③……

り。人の闇行するに、嚴刑の其の側に在ること有るがごとからしむ。

……あんかう……

……かたはら……

人が夜にこっそり行動するときも、まるで嚴しい刑がすぐ近くにあるかのように行動させている

宓子、何を以て此に至れるか。」と。孔子曰はく、「丘、嘗て之に問ふ

……どのよう……

……きう……

以前宓子にどのよう……に世を治めるのかを

に治を以てす。言ひて曰はく、『此に誠ある者は、彼に刑はる。』と。

……言ひ……

……言ひ……

……尋ねた……

……こちう……

……あちう……

宓子、必ず此の術を行ふならん。」と。

……きつ……このやり方を実践したので、あろう

『淮南子』による

（注）

○ 宓子、巫馬期ともに、孔子の弟子。

○ 宣父魯の国の地名。

○ 丘孔子の名。